

4. 重症妊娠中毒症における血液学的検討

鈴木正彦 (杏林大学医学部 産婦人科)
 狩野朗, 阿部穰
 吉村理, 山田栄子
 斉藤高志, 大倉竜子
 松田元, 高橋昌俊
 山田春彦, 岡宮久明
 松本忍, 斉藤博恭
 武者晃永, 深川俊太郎

1. 対象

重症妊娠中毒症	53例
軽症妊娠中毒症	185例
子癩	6例
対照として正常妊婦	71例

2. 測定項目

1) 一般血液検査

Hb. Ht. RBC. WBC. MCH. MCHC.
 MCV. BSR

2) 凝血学的検査

CRT. PCT. TST. PT. PTT. APTT
 fibrinogen. bleeding time.
 clotting time. plasminogen.
 platelet. platelet aggregation
 α_2 -macroglobulin. α_1 -antitrypsin.
 AT-III α_2 -plasmininhibitor
 serum FDP urine FDP TEG

3. 妊娠中毒症における血色素, および血球系の変動

1) 成績

1. 血色素量は差が認められなかった。
2. ヘマトクリットは, 重症群で高値をとった。
3. MCVは重症群で増大する傾向を示し, MCHは重症群で高値をとり, MCHCは低下していた。
 正常妊婦にみられる小球性低色素性の貧血とはすこし異なる型をとった。
4. CIは, 正常妊婦よりわずかではあるが高値であった。

5. 赤血球数は中毒症群で低値を示した。
6. 白血球数は差が認められなかった。
7. 血沈は軽症群で亢進傾向がみられ, 重症群と正常妊娠では差がみられなかった。

2) 結論

1. 重症群の貧血は, 正常妊娠の貧血と比べると, 高色素性, 大球性, 不飽和性の傾向をとるように思われる。
2. 重症度と貧血の関連は特にみとめられなかった。
3. ヘマトクリットが高く, 血液は hemoconcentration の状態を示すものと思われる。

4. 妊娠中毒症における凝血学的変化

1) 成績

1. CRTは3群で差はなかった。
2. PCTは重症群で高値をとったが, パラツキが大きかった。
3. TSTは3群で差はなかった。
4. PTは重症群で延長傾向にあったが, パラツキが大きかった。
5. PTTもPTと同様の傾向であった。
6. fibrinogenは重症群で高値をとった。
7. 出血時間は重症群でわずかに延長した。
8. 凝固時間は3群で差がなかった。
9. 血小板数は重症群で低値を示し, $12 \times 10^4 / \mu\text{l}$ 以下となるものが多かった。
10. 血清FDPは3群で有意の差はなかった。
11. ELTは重症群で有意の延長を認めた。
12. α_2 -antiplasmin は3群で差はなかった。

たが、全体にバラツキが大きかった。

13. α_1 -antitrypsin は3群で差はなかった。
14. α_2 -macroglobulin も α_1 -antitrypsin と同様の傾向であった。
15. AT-III は、重症群で増加した。
16. C_1 -inactivator は重症群で高値をとった。

2) 結論

重症群では血小板の減少がみられたが serine protease inhibitor は差がみとめられず、AT-III も低値を示した。これらの各々の成績からは、過凝固、低線溶の状態をそのまま示すものとは思われない。しかし、ELT が延長していることなどから、総合的に低線溶であると考えられる。

5. 重症妊娠中毒症における産褥期の凝血学的変化

1) 成績

1. PT は重症群で妊娠後期に延長傾向にあったものが産褥期に回復した。
2. APTT は重症群、正常群ともに産褥1~3日目に短縮傾向を認めた
3. fibrinogen は重症群ではやや増加傾向を示すものの、著明な変化はなかった。
4. 血小板数は重症群では、産褥4~16日目に著明な増加を認めた。
5. TEG では重症群では妊娠後期の、r, k の短縮傾向が産褥期にも持続し、正常群では産褥でやや延長して正常域に復した。
6. plasminogen は、ほとんど変化を示さず、AT-III はやや増加傾向を示した。
7. α_2 -macroglobulin はやや増加し、 α_1 -antitrypsin は減少傾向を示した。
8. 血清 FDP は、重症群で高値をとる傾向を示した。
9. 尿中 FDP は有意差はなかった。

2) 結論

1. 重症群では妊娠中の凝固亢進状態がひきつづき持続していると思われる
2. 正常群と比較すると回復の phase に差がみられた。

6. 子癇および重症中毒症の高血圧型、蛋白尿型における凝血学的変動

1) 成績

a 子癇

1. 子癇では重症群よりも低値をとり $1 \times 10^4/\mu\text{l}$ 以下のものが6例中3例にみられた。
2. 血清 FDP は6例中2例に高値をとった。
3. fibrinogen はバラツキが大きく、高値をとるもの、低値をとるものさまざまであった。
4. α_2 -macroglobulin, α_1 -antitrypsin は特に変化は認めなかった。
5. AT-III は低値をとり、plasminogen も低下傾向にあった。

b 重症中毒症高血圧型 (H type), 蛋白尿型 (P type) における比較検討

1. α_2 -macroglobulin は P type がより高値であった。
2. plasminogen は P type がより高値であった。
3. AT-III, α_1 -antitrypsin は P type, H type にて差はなかった。
4. α_2 -antiplasmin は P type がより低値を示した。
5. 尿中 FDP は P type がより高値をとった。

2) 結論

1. 子癇の発作にても、凝血学的変動がかなりみられ、特に血小板、fibrinogen の減少が著明であり、DIC の発症を疑わせる症例も存在した。
2. 重症中毒症高血圧型よりも蛋白尿型により凝血学的変動を認めた。